県中教育

随想

『子どもの心の居場所』

県中教育事務所長　佐藤　敏宏

今年四月から、県中教育事務所長を務めております。五月末から、域内の各学校を訪問させていただき、校長先生から学校の状況等についてお話を伺っています。訪問時には、短時間ですが授業の様子を参観させていただいており、教室で友だちや先生と関わり合いながら生き生きと学ぶ子どもたちの姿に、頼もしさと微笑ましさを感じています。その一方で、不登校についても話題になることが多く、大きな課題であることを改めて受け止めているところです。

さて、先日、ある本を読んでいた時に、見当識という言葉に出会いました。見当識とは、今の自身の状況を、時間や場所、人などと関係付けて把握することです。現在から未来といった時間の感覚、生活の場や地域といった空間の認知など、生活には必要不可欠なものです。見当識が不十分であれば、いつ、どこで、何をしたらよいか分らずにとても不安になることでしょう。私たちが、異動して職場が変わった最初の日に、日程を詳しく確かめたり、トイレや給湯室を確かめたりするのも、自分の状況を把握して安心するためかもしれません。不登校の子どもの中には、学校や家庭で見当識がもてなくなり、自分がどうしたらよいのか分からなくなっている子もいるのではないでしょうか。

学校を休みがちだった子どもが再び登校するようになったスペシャル・サポート・ルーム（ＳＳＲ）の取組には、幾つかの共通点があります。子どもが自分のペースで学べる居場所があります。生活の時間などを自身の意思で決める機会があります。できたことをほめてくれたり、困っていることを一緒に考えてくれたりする先生がいます。もちろんこれだけではありませんが、ＳＳＲでは、時間や場所、人との関わりの中で、子ども自身がゆっくりと、自分の得意なことや不得意なことなどに気づきながら、自己理解を進めています。これらの取組が子どもの不安を取り除いているのだと思います。

このような取組が域内に広がり、子どもの心の居場所が増えていくことを願っております。

最後に、日々真摯に子どもと向き合い、子どもの自己実現のためにご尽力いただいている先生方に心から感謝いたします。

編集・発行
福島県教育庁
県中教育事務所

発行責任者
佐藤　敏宏

編集協力
県中市町村教委連各支会
県中各地区小中学校長協議会

郷土愛育む「あのね」

古殿町教育委員会教育長　渡邊　宏文

標題の「あのね」は、古殿小学校で朝の読書タイムの時間に読み聞かせを実施していただいている団体の名称です。二〇〇六年に結成され、小学校や図書館、デイサービス、地域の集会等で読み聞かせのボランティアに取り組んでおり会員数は十名です。小学校で年間二十回程実施し、児童たちはこの読み聞かせを毎回楽しみにしています。

ここまでは普通の活動かと思われますが、「あのね」が特徴的なのは、二〇一四年から古殿町の昔話を紙芝居に制作し、読み聞かせを実施していることです。さらに二〇一六年からお話の絵コンクールを開催し、小学生が読み聞かせの昔話を聞いて全校生で絵を描いてコンクールに参加します。入賞作品は紙芝居の絵に採用されます。後にその紙芝居を絵本に制作し、全校生に配付します。費用も嵩みますが、独自に町や県の補助金申請をして絵本の制作費やコンクールの景品代を得ており、これもまた一苦労とのことです。

「あのね」の代表者に伺ったところ、町内行政区十地区の昔話の紙芝居制作を目指しており、現在八地区が完成。あと二地区の制作に向けて頑張っています、ということです。

さらに、紙芝居制作に小学生に関わってもらうことで、町の歴史や文化遺産に興味を持つきっかけになり、古殿町に対する郷土愛を育むことに繋がったら嬉しいのです、と話す目はとても輝いていたのが印象的でした。「あのね」に対する感謝の気持ちと同時に、私自身も職務に対する活力をいただいているところです。

最後になりますが新型コロナウイルスの終息まではまだ遠い現状です。今までの二年半、教育活動の中止や自粛、内容の変更や制限の連続でした。今後も地域や学校の実情に応じて創意工夫し本来の教育活動が益々充実することを願って教育行政を推進していきたいと思います。

子どもの読書活動優秀実践校としての取り組み

郡山市立湖南小中学校

はじめに

図書館に行くと「何かありそう」「わくわくする」・・・子どもたちの好奇心を刺激し、自然と足が向く、そんな魅力あふれる図書館づくりに取り組んでまいりました。本校の地道な取組を評価いただき、この度、子どもの読書活動優秀実践校として文部科学大臣表彰を受けました。本稿では、その一端を紹介いたします。

①湖南の自然・素材を活用した体感型図書館を目指して

図書館の至る所に地域の四季折々の自然を掲示することで、子どもたちの興味関心を高め、地域を大切に思う気持ちを育ててきました。

②学習・情報センターとしての機能を最大限に生かして

子どもたちが、資料を見つけやすいように本の配置に気を配り、調べ学習を円滑に行えるよう、図書館の整備に努めてきました。また、郡山市中央図書館との連携による資料の貸出や配本も行ってきました。こおりやま文学の森資料館や郡山市立美術館等と協力した展示会を行い、子どもたちが作家や作品をより身近に感じられるよう掲示物等の工夫をしました。

③本校独自の「読書の手引き」の作成と活用を通して

学年ごとに子どもたちの発達段階を考慮した「読書の手引き」を作成しました。読書の推奨や、校内の図書イベントで活用することで、子どもたちが図書館に足を運ぶきっかけづくりに役立てています。

④ビブリオバトルによる表現力の育成を目指して

ビブリオバトルは、今まで読んだことのない本に興味を持ったり、表現力を高めたりする上で、とても有効な取組となりました。

⑤朝の読書活動や諸活動との連携を通して

子どもたちが、落ち着いて朝の時間を迎え、改めて本の楽しさや面白さに気づくきっかけになるよう、朝の十分間読書を取り入れました。また、保健室とタイアップした健康教育の推進や地域と連携した郷土学習など、教育活動の様々な場面で図書館を活用し、教育効果を高めています。

結びに

子どもたちが自主的に図書館に足を運ぶ環境づくりを心がけてきました。図書館が子どもたちにとって、日々の情報収集と発信の場であるのはもちろんのこと、居心地のよい心安らぐ場所であること、そしてみんなが集い、みんながつながる、そんな学校図書館づくりをこれからも追求してまいります。

ふくしまっ子体力向上総合プロジェクト「い」つも「わ」らい声と「え」顔の絶えない元気な学校

三春町立岩江中学校

本校では、学校の強みと特色を生かした体力・健康づくりに「チーム岩江」で取り組んでいます。

オリパライヤーだった昨年度は、聖火リレーで実際に使われたトーチを体育的行事で活用したり、町内出身のパラリンピアンとの交流の機会を設けたりして、スポーツへの関心を高める工夫をしました。自然豊かな敷地を利用したクロスカントリーコースは、生徒自身の手で整備し、主に部活動で活用しています。

また、同町内の中学校に勤務している栄養教諭を活用した「食育講話」では、各学年の発達段階に応じたテーマを設定し、食と健康・運動について理解を深めました。

さらに、次世代の健康教育の一環として、養護教諭と学級担任の連携により、「自分手帳」を計画的・効果的に活用し、健康マネジメント力の育成に取り組んでいます。

体力・健康づくりの要である保健体育の授業や体育的行事においては、「昨日の自分より今日の自分」という意識と、運動を「仲間と楽しむ」という雰囲気づくりを心がけています。運動が「できる」「できない」という見方だけではなく、体を動かす意欲を高め、主体的に運動に親しみ、「運動好き」の生徒が一人でも多くなるような取組を工夫しています。

今後も、「ふくしまっ子元気大賞」の受賞を励みに、生徒の体力・健康づくりに責任を果たすことができるよう、教職員一同取り組んでいきたいと思います。

初任者紹介～三か月を振り返って～

浅川町立あさかわこども園

教諭　井坂　愛

四月から浅川町立あさかわこども園の教諭として働き始め、元気いっぱいの子どもたちとの生活も三か月が過ぎようとしています。

四月当初は新しい環境の中、分からないことばかりで見通しがもてず、不安で一杯の毎日でした。しかし、先生方に助けていただいたり、子どもたちと一緒に過ごしたりしていくうちに、少しずつですが余裕ももてるようになりました。周囲の先生方や家族の支え、子どもたちの笑顔に何度も助けられました。

その中から、今後どのような教諭になりたいのか、どのような教育をしていきたいのかを少しずつ見つけ始めることができるようになってきました。

これからは、今以上に子どもたくさん触れ合い、本気で向き合い気持ちに寄り添っていきたいです。一緒にいて安心できる大好きな先生だと思ってもらえる存在を目指して、日々学ぶ気持ちを忘れず、成長していきたいと思います。

田村市立常葉小学校

教諭　横山　夢乃

四月に常葉小学校に着任し、教員生活がスタートしました。自分の思い描いていた生活とは違い、自分の考えが甘いと感じる日々を過ごしていました。子どもたちに伝えようとしてもうまくいかず、落ち込む日々が続きました。そんなときに、先生方の励ましの言葉や研修を通してのアドバイスが私の心を救ってくれました。少しずつ子どもたちが反応し、変わってきた姿を見ると、やりがいを感じるようになりました。まだまだ悩みは尽きませんが、子どもたちの元気なあいさつや、満面の笑みで駆け寄ってきてくれる姿が、私のやる気スイッチをオンにし充実した日々を過ごすことができています。

常葉小学校は、自然の豊かさ、素直な子どもたち、地域の方の温かさ、先生方のチームワークの良さが自慢できると思っています。また、小中一貫教育を進めていて、中学校の先生方とも交流があります。このような環境の中で、教員生活をスタートできたことを幸せに思い、未来を担う子どもたちのために研修に励んでいきます。

鏡石町立鏡石中学校

教諭　渡部　陽稀

四月に鏡石中学校に着任し、忙しくも充実した三か月が過ぎました。私は、一学年の副担任、一学年の英語科、陸上部・男女バドミントン部それぞれの副顧問を任されています。

赴任してからしばらくは、右も左もわからず不安と心配が募る日々でした。そんな中でも、朝、昇降口に立って挨拶をしたり、先輩教員について回り指導の様子を観察したりと自分にできること、自分がすべきことは何なのかを考え、一日一日を夢中で過ごしました。来年度以降、一人でも自信を持って教員生活を送れるよう、実りある一年目としたいです。

現在では、先輩教員の皆さんや子どもたちとの関わりから多くの気づきと反省があり、刺激を受ける毎日を過ごしています。私がこれまでたくさんの人に支えていただいて現在に至るように、今度は私が未来を担う子どもたちを支えていきたいです。学び続ける教員を目指し、教員としても人間としても子どもたちのお手本となれるよう精進していきます。

福島県立郡山支援学校

教諭　村上　俊輔

四月に郡山支援学校に着任してから、早くも三か月が過ぎようとしています。初めてのことばかりで、緊張と不安が大きい毎日ですが、自分の相談に親身に応じてくださる先生方や、毎日「先生！」と笑顔で話しかけてきてくれる生徒たちのおかげで、充実した毎日を過ごしています。

初任者研修の講義で、生徒とのかかわりが「子どものためになっているのか」を考え続けることの大切さを学びました。生徒とかかわるなかで、生徒の気持ちをしっかりと理解できなかったり、自分が思うようなコミュニケーションが取れなかったりと自分の未熟さを痛感する毎日です。しかし、お互いの気持ちが通じたり、生徒が頑張ろうという意欲を出してくれたりしたときには、大きな嬉しさを感じ、もっと頑張ろうと思うことができます。

これからも、学び続ける気持ちを忘れずに、生徒のことを一番に考え、「生徒と一緒に成長する教員」になれるよう、頑張っていきたいと思います。

郡山市立守山中学校

養護教諭　柳沼　由佳

出身地である長野県での勤務と、会津若松市での講師経験を経て、今年四月に初めて中学校の保健室に勤務することになりました。

他県から来た私は、福島の子どものまっすぐさと責任感の強さを感じています。そんな子どもたちの成長をサポートできるように、自分自身も背筋を伸ばす毎日です。この三か月の間に、保健室で弱音を言ったり、涙したりする生徒を見てきました。そういう姿を見せていいよ、心の休憩もしていこうねというメッセージが伝わる保健室にしていきたいと思います。

保健室に来室した生徒が、その後元気に授業や部活に打ち込む姿を見るときが一番嬉しいと感じます。「先生、昨日のけが、もう平気です。」と伝えてくれる生徒もいます。目の回るような忙しい毎日ですが、自分自身も生徒や先生方、保護者に支えられていることに感謝し、これからも自分にできることを精一杯やっていきたいと思います。

県中教育事務所よりお知らせ

総務社会教育課
社会教育担当より

家庭教育推進県中ブロック会議について

県中教育事務所では、家庭教育の重要性を鑑み、各地区ＰＴＡ連合会代表者、学校支援者、地域の子どもたちに関わる諸団体の方々、家庭教育支援者、企業の代表者等十六名の方々を家庭教育推進委員として構成し、年二回県中ブロック会議を開催しております。

会議では、県中域内の家庭教育の現状と課題を把握し、家庭教育の推進や地域教育力の向上を図るため、学校・家庭・地域が連携し、各地区で実践的な活動が展開できるよう話合いを行っております。

第一回の会議を、六月十三日に開催し、郡山警察署生活安全課の安孫子由佳氏より「県中域内の青少年犯罪と非行問題の現状と課題」についてお話いただき、後半は県中域内の家庭教育の現状と課題について情報交換を行いました。その後、地域や学校、各関係機関等における家庭教育の役割や家庭教育をどのように推進すればよいかについて全体で協議し、今年度の県中域内の家庭教育推進の重点化を図ることができました。

読書活動支援者育成事業研修会

今年度の読書活動支援者育成事業研修会は、三部で構成し実施しました。

はじめに、郡山市立開成小学校司書の仲澤沙也果氏より児童の読書への興味関心を高めるために行った取組についてお話いただきました。季節ごとのイベントを企画したり、図書館の環境整備をしたりしたことで、児童一人あたりの図書貸出冊数が大幅に増えたとのことでした。参加者からは、企画の具体的な内容や、今後も継続して取り組むために必要なことなどについて多くの質問があり、自分たちの活動に生かそうとする姿がありました。

次に、石川読み聞かせの会代表冨岡ケイ子氏より、実践を発表していただきました。会のモットーは「聞く人を惹きつける読み聞かせ」であり、エプロンシアターや人形劇、琴の演奏などを絵本の読み聞かせと組み合わせ、相手に応じた読み聞かせ活動を小学校や図書館などで行っています。研修会では琴の演奏と組み合わせた「花さき山」の読み聞かせを披露し、参加者を魅了しました。

講演では、福島テレビアナウンサー坂井有生氏に「朗読は読むものではなく『伝える』もの」という演題でお話いただきました。朗読で『伝える』ためには、「間」を大切にしてゆっくり読んだり、声の高低や強弱に気をつけたりすることなど、アナウンサーとしての経験をもとに、ユーモアを交えて分かりやすくお話いただき、参加者は終始笑顔で、聴くことができました。

学校教育課管理担当より

校長及び教員としての資質の向上に関する指標【第二版】について

令和四年四月に、校長及び教員としての資質の向上に関する指標【第二版】が各学校に配布されました。今回の指標の特徴は、四つの領域（Ⅰ教員としての素養、Ⅱ学びの創造、Ⅲ児童生徒の理解と指導、Ⅳ教職員の協働と学校づくり）を十三項目に区分し、分野ごとに身に付けるべき資質能力を示しています。また、「福島県が育成を目指す教員像」と東日本大震災及び原子力災害の経験を踏まえた「福島らしさ」を示し、その内容を反映させています。

初版（平成三十年度）からの変更点は、指標対象に学校栄養職員と保育教諭等を新たに加えました。さらに、養護教諭、栄養教諭・学校栄養職員については、「Ⅱ学びの創造」を「Ⅱ専門領域」として別に定めました。校長・副校長については、身に付けるべき資質を四つの領域に分けて示してあります。

今後、本指標を各種研修受講時はもとより、自らの教育実践の省察等に是非活用していただきたいと思います。

学校教育課指導担当より

不登校児童生徒への対応について

第七次福島県総合教育計画が策定されました。施策三「学びのセーフティネットと個性を伸ばす教育によって多様性を力に変える土壌をつくる」の主な取組に「不登校児童生徒、帰国児童生徒、外国人児童生徒等への個別支援の充実」があります。県中地区においても、不登校児童生徒の増加と学習機会の確保が課題となっています。

先生方には、児童生徒のちょっとした変化を見逃さずに支援をするとともに、児童生徒が困ったときに相談できる体制の整備と周知をお願いします。

学習機会の確保として、ＩＣＴ機器を活用する学校が増えました。実態に応じて、校内外で不登校児童生徒と学級・学校をつないでいただいています。また、関係機関等と連携して支援にあたることで、不登校の解決につながる児童生徒もいます。

長期休業明けに新規不登校児童生徒が増加しますので、学校組織として、対応してくださるようお願いします。

「授業の魅力化応援プロジェクト」について

第７次福島県総合教育計画が策定され、本県教育の基本方針が示されました。一方通行の画一的な授業から、個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びへと「学びの変革」が求められています。特に、昨年度の全国学力・学習状況調査の結果から、本県において算数・数学科の学力に依然として課題が見られ、授業改善による学力向上が急務となっています。

福島県では、今年度より「授業の魅力化応援プロジェクト」を立ち上げ、義務教育課指導主事による「算数・数学授業づくり支援訪問」を各学校の要請に応じて複数回に渡り継続的に実施して参ります。また、「オンライン研修会」を年間十回実施します。各種学力調査の結果から見える課題のある学習内容等の対策について、情報提供や協議により、児童生徒に目指す資質・能力を育む授業づくりに向けた支援を行って参ります。ぜひ御活用ください。